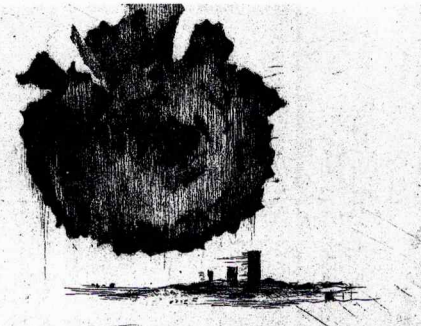


朝日 俳壇 歌壇



〈ランキユラスと街なみ〉 岩尾恵都子

高野公彦選

河口へと近づくと川はいま海へ呑まれんとして
至福の汽水 (福島市) 美原 連子
アスファルトの下はすべ土の昔旅の役者や
商人がゆきし (生駒市) 辻岡 英雄
☆はや雪は二階を埋めんと降り積もる太郎も次郎も眠れぬほどに (光市) 永井すず恵
☆こんもりと雪に埋もれた駐車場目星をつけて掘り出す愛車 (富山市) 松田 梨子
雨らしい雨も降らずに三月半 五風十雨の言の葉恋し (常陸大宮市) 和田 行男
四国には新幹線は要らないと春の通路を見るたび思う (観音寺市) 篠原 俊則
拉致家族どんな気持ちで聴いたらう総理の語る「楽しい日本」 (三重県) 藤井 恵子
☆尖ってはいるけど刺してはいけません著の文化のやさしい掟 (新潟市) 太田千鶴子
新しき卒塔婆を前に口遊む妻の好きだった「早春賦」の歌 (茨城県) 渡辺たかし
はしゃぐ孫吐てくれる人のいてバスの中だけ昭和に戻る (秦野市) 三宅 節子

【評】1 首目、海に呑まれる直前の川の陶酔感を詠う。2 首目、直ぐ身近な所にある人間の歴史。3 首目、「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。／次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。」という三好達治の詩「雪」を踏まえた作。

永田和宏選

近づくとき大きく口開け威嚇するアメリカ生まれのアカミミガメは (神戸市) 前田 素代
最後の処分施設がないままに中間貯蔵施設と呼ばれて (いわき市) 齋藤 久子
間に合ってよかった短歌詠みはじめ馬場あき子さんの選のあるうち (東京都) 椿 泰文
「空蟬」の解説語る能舞台多面体にて歌人と呼ばれ (福生市) 齊藤 千秋
馬場さんに選ばれるのが夢だった死ぬまで歌は詠むだろうけど (大田市) 安立 聖
亡妻黙りしらく続々歌さへも喜びなりし日々なつかしき (仙台市) 二瓶 真
ひとりでは取り戻せない思い出の二月の海に会いにきました (京都市) 美玉 孝文
珍しき便りにはつくき奴からではほうどれどれ敵も老いたり (東京都) 渡部 鈴代
山積みの本と議論と一升瓶思いだす夜に飲む茶碗酒 (石川県) 瀧上 裕幸
電柱に腰かけられるほど降ると豪雪語る肘折の旧友 (仙台市) 沼沢 修

【評】前田さん、諷刺とウィットの利いた、脱帽の一首。何も説明しないところが絶妙。齋藤さん、中間と呼んでおけば抵抗も少ないかという、言葉のまやかしに敏感に反応。三～五首目、馬場あき子さんの選者退任を惜しむ歌が多く寄せられた。

馬場あき子選

秘め事のようにティッシュに包みいる乳歯をそっと見せける孫 (観音寺市) 篠原 俊則
☆病院の中の学校の放課後は手品待つ子の病室に行く (岡崎市) 三上 正
☆こんもりと雪に埋もれた駐車場目星をつけて掘り出す愛車 (富山市) 松田 梨子
瓦礫から更地となりて悲しみは更にと能登の人は語れり (倉吉市) 砂原 誠子
☆はや雪は二階を埋めんと降り積もる太郎も次郎も眠れぬほどに (光市) 永井すず恵
ホタルイカ傷つけぬためと丁寧に裏で編まれた定置網あり (石川県) 瀧上 裕幸
東京に出れば娘はもどらぬとさびしげに言うふるさと人は (仙台市) 沼沢 修
軍事費が五割を占める戦前の民の暮らしはみんな貧しい (三郷市) 木村 義照
開戦のころ難産くぐり生まれた母乳の代り米重湯なりき (盛岡市) 堀米 公子
轢かれたる狸の体こんもりと白き小山に雪降り止まず (鳥取市) 山本憲一郎

【評】第一首のお孫さんは乳歯が生え替わる初体験に神秘的驚きを覚えたのであろう。ティッシュに包んだ歯を「秘め事」のように見せてくれたところがすばらしい。第二首の「手品待つ子」の病室、これもその場が想像され心温まる思いだ。

佐佐木幸綱選

四季ひとつ移ろうたびに子ともらに一度と着られぬ服増えてゆく (市川市) 黒木 郁
ストビューに更地となりし生家跡砂利と空とのふる里に (白井市) 本山 正明
☆こんもりと雪に埋もれた駐車場目星をつけて掘り出す愛車 (富山市) 松田 梨子
戦渦にも書店増えゆくウクライナ心の支え求めるように (中津市) 瀬口 美子
☆病院の中の学校の放課後は手品待つ子の病室に行く (岡崎市) 三上 正
如月の余寒と予感とちらにも春待つ期待と焦燥がある (東京都) 小林 容子
☆尖ってはいるけど刺してはいけません著の文化のやさしい掟 (新潟市) 太田千鶴子
マイナカード顔認証はきらいです吾に似る老婆がアップで映る (松戸市) 猪野 富子
当局の監視下なれと献花する行列絶えずナワリヌイ氏の (五所川原市) 戸沢大二郎
春近き宵闇に見え明るさを増し行く夜間中学の窓 (観音寺市) 篠原 俊則

【評】第一首、子の成長の早さを一気に表現して独特。「ひとつ」と「二度」も、効果的。第二首、生家がなくなってしまった空虚感。「ストビュー」は「ストリートビュー」の略。第三首、今冬の富山はたいへん雪だったらしい。

馬場あき子さん退任を惜しむ声

朝日歌壇の選者を47年間務めてきた馬場あき子さんが3月末で退任することが決まり、続々と反響が寄せられています。退任を惜しむ投稿歌の一部は、さっそく本日の歌壇面にも掲載されました。「97歳まで元気な選者をされていたことに敬意と感謝を申し上げます」「選歌で、馬場さんの反戦の志に何度も励まされてきた」といった声や、投稿した歌が馬場さんに採り上げられた思い出をつづるものも多数ありました。東京

都の上田結香さんは、2014年に入選した歌へ帰ったまた喧嘩ばかりするのでしょうけれど仲良し見た旅の景色に對する「喧嘩も楽しい」という選評にやさしさがあふれていて、胸が熱くなりました」と振り返ります。2月25日付の記事で触れた「より良い歌を詠むために必要なのは『言葉を感じ、石にかけること』」という発言に対しては、「この一文を心に刻み、精進していきます」という決意も寄せられています。

退任を記念して4月19日に朝日新聞東京本社で開く記者サロン「馬場あき子さんへ振り返る 朝日歌壇の半世紀」では、心に残る投稿歌や作者について何うほか、募集する短歌(希望者のみ、自由詠)から馬場さんが数首選んで講評します。短歌の締め切りは3月20日。申込時のアンケートの中で受け付けています。会場の定員は100人。4月25日からオンラインでも視聴可能(定員なし)。紙面購読者は無料で申し込みます。申し込みは募集ページ(<https://t.asahi.co.jp/woov>) またはQRコードから。(歌壇担当・佐々波幸子)

田島健一著「平成の一句」 1月1日の「元旦やまつさらの空騒ひたる」(桂信子)から12月31日の「除夜の鐘僧の反り身を月光に」(山田弘子)まで、1日につき1句、1年分の365句を紹介。(ふらんす堂・1980円) 第42回兜太現代俳句新人賞 現代俳句協会主催。千葉市の首瀬一寛さん(27)の「火の聲」(50句)に決まった。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合もあります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。